

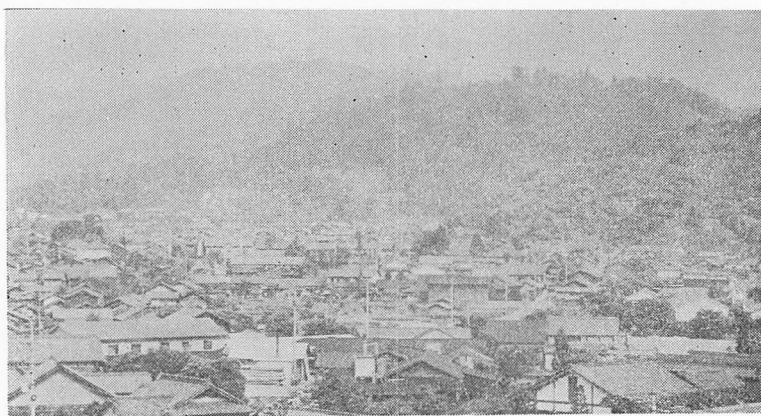
第二章 早矢仕有的の出身

一 早矢仕有的の郷里

早矢仕^{はやしゆうご}有的^{うゑき}は、美濃国武儀郡^{むぎぐん}笹賀村の出身である。笹賀村は、江戸時代には、同じ美濃の岩村藩の領地^{とくち}の飛地^{とびち}であった。岩村は恵那^{えな}から阿木川に沿うて明知^{あけち}に達する中途にあって、美濃国ではあるが、木曾川を越えて、信濃と三河との間に、深く斗出し、古くから要害の地として知られていた。そのために鎌倉時代以来、遠山氏が此処に拠り、戦国時代には、武田氏と織田氏との争奪の地点となった。信長の寵臣森蘭丸（長定）及びその一族も、天正年間に、岩村の城主であったことがある。

江戸時代になって、慶長六年（一六〇一年）大給^{おぎょう}松平氏（初代家乗）がはじめてこの地を領し、寛永年間に丹羽氏がこれに代ったが、元禄年間になって、松平氏の分家（乗政）が、またここに入部し、以来七代百数十年間ここに在城して、明治の廃藩置県に及んでいる。その城址はいまもなお往年の倅を留め、大手から北に下る坂道の町並も、物さびて古めかしい。

岩村藩は松平乗政の入部の時には、その禄高は二万石であったが、享保二十年（一七三五年）松平乗賢が老中となるに及んで、駿河と西美濃で、それぞれ五千石ずつ加増せられて三万石となった。笹賀村は、この時に、上白金、

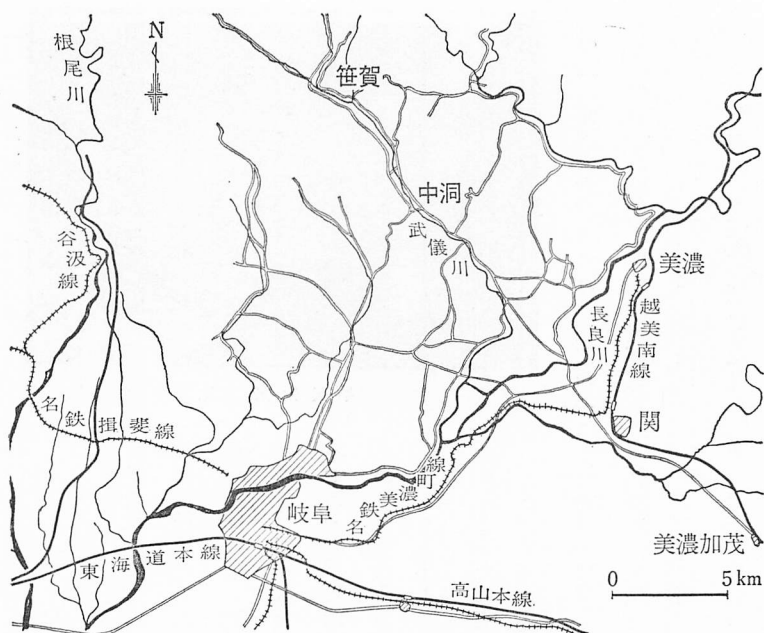


岩村町（城址は右の山頂 西北より東南を望む）

下白金、跡部、田栗などの諸村と共に、岩村領となったものである。

岩村の本領からは、かなり離れている飛地のために、他の諸村と共に、岩村から北方（安八郡）に派遣された郡奉行の支配を受けていた。そのために明治二年の版籍奉還の際には、享保加増の分は、本領から切り離されて笠松県に編入され、以来何回かの行政区画の変遷があつて、現在は岐阜県・山県郡・美山村の所属の部落となつてゐる。

笹賀部落は、岐阜市から北方約三十キロメートルの武儀川上流の溪谷の北岸に位置している。いまは岐阜からバスの便がある。夏は涼しいが、冬は三十センチほど積雪があるという。典型的な山間の小村で、平地は極めて乏しいから、農業にはほとんど見るべきものがない。岩村藩時代の村高は、百三十二石九斗八升という。そのために早くから副業としての家内工業が行われ、江戸時代中期以後は、製糸業が盛んであつた。また付近一帯では楮を植えて、武儀川で紙漉きを行ない、障子紙や小菊紙などの、いわゆる美濃紙の生産地の一つであつた。明治・大正を通じて、紙漉きは、なお引き続いて行われていたが、和紙の使用が衰えると共に、昭和二十五年頃に全くその業は絶えてしま



笹賀村（東北より西南を望む）

った。現在は同じ家内工業ではあるが、水道の蛇口などを製造する金属工業が主な産業となり、全部落（七十戸余）の大部分が、これに従事している。



早矢仕家墓地

二 早矢仕有的の家系とその青年時代

早矢仕家の本家に伝わる旧記によると、早矢仕家はもと林といって、本姓は国枝氏である。美濃国・厚見郡・江崎^ち邑の城主であったが、天文年間林和泉守政信（新助？）の時に、領地を失なうて、土岐頼藝^{よりよし}のもとに身を寄せて、武儀郡と山県郡の内で三百五十貫の土地を与えられた。射術に巧みであつて、戦功があつたために、頼藝はこれを愛して、その姓を早矢仕という文字に改めさせたという。なお早矢仕の姓を賜つたのは国枝孫十郎と国枝左衛門尉と二度あつたといつて、伝説は混乱しているが、恐らく何か核となつた事實はあつたものであらう。

早矢仕政信は天文十六年（一五四七年）に戦死して、間もなく土岐氏も斎藤氏のために亡ぼされた。政信の妻は幼児を守つて、笹賀村に落ち延び、以来笹賀は早矢仕氏の郷里となつた。

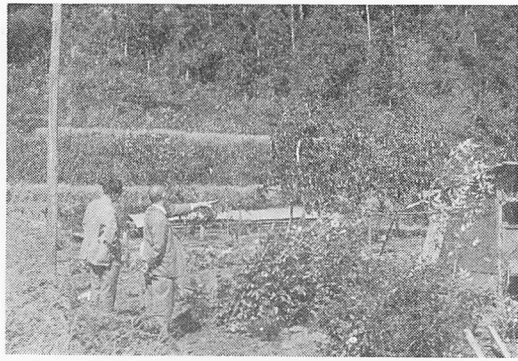
その子孫は江戸時代の中期以後、代々歳^{さい}兵衛また才兵衛と称して笹賀村の庄屋であつた。歴代の墓地は笹賀の永昌寺にあり、その過去帳の写しも保存されている。その第三代の才兵衛が即ち家系の上で有的の父に当る人物である。しかし有的は、直接才兵衛と血縁の関係はない。有的の母はためといい、武儀郡関町（現在の関市）の辰巳屋龜山五平の妹であつて才兵衛に養われたものである。才兵衛は自分に男子がなかつたために、飛瀬村の野村寅助の子

の賢治を養子とし、また後に実子の周（女子）が出来たが、更にために周の妹として育てたものである。ためが成長すると、才兵衛はこれを山田柳長に嫁がせた。柳長は山田玄順の子で、山田家は代々笹賀村の医師であった。今もその屋敷趾や薬草園の趾が残っている。ところが不幸にして柳長は、その後間もなく天保八年（一八三七年）五月二十六日に、わずか二十六歳の若さで死んだ。ためは養父の才兵衛のもとに引き取られたがその時すでに身ごもっていた。そして夫が死んでから二か月ばかりで八月九日に男児を挙げた。これが有的である。有的は母の胎内にある時に、すでに父を失っていたのである。

そこで才兵衛は義理の孫に当たる有的を、自分の子のようにして育て、ここに有的は早矢仕の姓を冒すことになった。有的は後になって、その六男の九郎に実父の山田姓を称させた。しかし九郎は早く死んだので、現在山田家は絶家になっている。

三 有的の青年時代

有的は幼名を左京といった。幼ない時から明敏であったために才兵衛はこれをひどく可愛がって、常に自分で抱いて寝て、面白い話を聞かせたという。有的はやや成長すると、亡父の後を継いで医師となることを志し、はじめ大垣で、ついで名古屋で医学を修業し、嘉永七年（一八五四年）十八歳の時に、業を終えて笹賀に帰り、実家で医師を開業した。しかし母のためは、愛児の成業を見ないで、その前年に歿している。有的は肉親の関係については、すこぶる不幸であったといわなければならない。



早矢仕家旧居の地

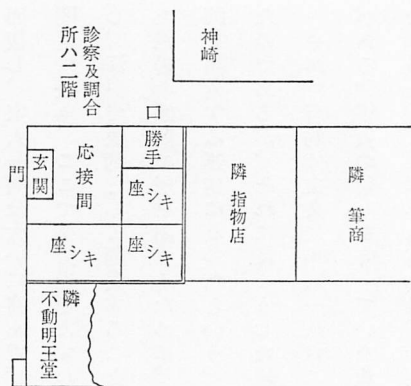
有的は青年医師として、五年の間笹賀で診療に従がい、伎倆が優れていたために村民から重んぜられた。時に同郡中洞村の庄屋に高折善六という者があった。彼は有的が有為の才を抱きながら、田舎医師として埋没するのを惜しみ、江戸に出て、更に一層医学の蘊奥を極めることを勧めた。有的自身もかねてその希望があったのであろう。その勧めによって、彼は決心を固め、門人の鬼頭祥斎（仁菴^{あん}）に笹賀の医業を委ねて、安政六年（一八五九年）郷里を出発して、江戸に赴いた。この時善六は餞別と和歌一首を贈って、有的前途を激励したという。後に述べるように、丸善の称呼のもとになった丸屋善八の名は、この善六を記念したものである。

四 江戸における早矢仕有的

早矢仕有的が江戸に出たのは、安政六年九月のことである。はじめは両国の薬研堀の小林龍仙のもとに、ついで新井白蛾のもとに、更に年末には林町の休兵衛の店に、転々として居所を変えた。郷里の笹賀では評判の医師であっても、まだ年齢も若いことではあり、江戸のような大都会では、直ちに開業することは望み得べくもないために、有的はしばらく按摩を業とした。按摩というと、少し異様な感じがするが、これは当時の医学書生に取っては、極めて普通なアルバイトであった。緒方洪庵自身が坪井信道の門下生の時に、玄関番をしながら、按摩をして収入を

得たという。洪庵が大坂で適塾を開いてからも、塾生で按摩をする者が多かった。大鳥圭介などもその一人であって、洪庵は大鳥に肩を揉ませながら、自分の若い頃の比でないと、その技術の巧みなのを賞讃したという逸話がある。有的もまたその一人だったのであって、ある按摩に医書を教えて、その代りに按摩の技術を学んだということが伝えられている。そして需めに応じて按摩の治療する際にも、症状を診断して、これに適当な服薬を勧めたために、病家から大いに感謝されたという。大塚熊吉の談話によると、さる木綿問屋の隠居が非常に有的を愛したが、図らずも重い病に冒されて、主治医も遂に匙を投げることとなった。その時に有的はこれを診断したところが、なお望みがあるために、家人に処方箋を与え、且これを調剤する薬店を教えた。この処方箋は効を奏して、幸に隠居は回復し、家人一同は大いに喜んだ。薬店ではこの処方の尋常でないのを不思議に思っ、薬取りの使を追うて木綿問屋に赴き、ここで処方者をたずね、且紹介を求めて有的に面会した。そしてその履歴を聞くに及んで大いに感動し、江戸で医師として開業することを勧め、自らその薬局の設備を負担することを申し出た。木綿問屋の主人もまた隠居の回復の恩を謝するために、家作その他を負担することを申し出て、ここに両家の協力によって、有的は医師を開業する運びになったという。有的は万延元年（一八六〇年）六月に橘町三丁目の平兵衛の店を借りて開業したのであるが、それにはこうした経緯があったのであろう。

やがて有的は文久二年（一八六二年）にその居を薬研堀に移した。建築費三十一兩二分、建具代五兩という記録がある。笹賀の留守を守っていた鬼頭仁菴も、有的のあとを追って出府したが、間もなく病死したのは遺憾なことであった。この頃から有的は、診療に従事すると共に、蘭法医学を学ぶことを志し、坪井信道に師事することとな



薬研堀宅の見取図

った。この信道は蘭法匠として盛名のあった初代信道の長男である。はじめは伊東玄朴に就こうとしたが、信道の人格に服してこれに教を乞うことになったという。信道も有目的の才を認め、文久三年（一八六三年）に自ら媒妁して、深川伊勢崎町の旗本諏訪新吉郎の妹なをを有的に娶らせた。これが有目的の先配である。また信道の推薦によって、岩村藩主松平能登守（乗命）の御抱医師となり、二十人扶持を給わることとなった。信道は前から松平家の御出入の医師であって、そのために岩村領内出身の秀才として、有目的をその領主の松平氏に推薦し、松平氏もその縁故によって、喜んでこれを迎えたのであろう。なおこの時有目的は、丸腰

でなければという条件をつけて、藩の許可を得て、無刀で出仕したという逸話がある。

なお「岩村藩令誌」の明治二年の条に

早矢仕有的

病氣に付内願之趣無_レ扨相聞候間被_レ聞召届御暇被_レ下置候事

己五月十四日議行局

とあって、有目的の藩医辞任を承認している。思うにこの頃は有目的の自身丸屋商社その他社会的の活動が多くなつて来たために、藩医としての職責を尽し難いことを認めたのであらう。岩村藩閥系の文書に有目的の名の見えるものは、

ただこれだけである。

これよりさき嘉永六年（一八五三年）に、アメリカ合衆国の水師提督代將^{コンドール}ベリーは、四隻の艦隊を率いて浦賀に來航した。そしてその強硬な要求によって、翌年には神奈川条約が締結された。また引き続いて、ロシア、イギリスとの間にも開港条約が締結された。これまで長崎でオランダとのみ接触していた日本の対外関係は、ここに大きい変化を見ることになった。とりわけアメリカ合衆国の政治的・文化的勢力は、強く日本に影響を与えるようになった。明敏な有的は早くこの情勢を看破したらしい。彼は蘭学から更に英学に進もうとした。有的の出納簿である「散貨録」によると、彼は文久三年に英蘭辞書を買っている。英学に対する志向がかなり早くからあったことがわかる。

有的は英学を修めるに当って、はじめ坪井信道（二代）の弟の谷信敬（敬三）の門に入った。この時同門には、阿部泰蔵があった。阿部泰蔵は三河国吉田（豊橋）の出身で、後にまた有的と同じく慶応義塾に学んでその塾頭となった。明治になって彼が明治生命保険会社を創立し、実業界の巨頭となったことは、よく知られている。作家水上瀧太郎（阿部章蔵）は、その子である。阿部泰蔵は後に丸善商社の取締役となっているが、それはこの頃からの縁故に因るものであろう。

五 有的と福沢諭吉

有的は慶応二年末までは、谷信敬の塾に在籍したようである。しかしこの塾は間もなく廃せられたらしい。そこ

で有的は慶応三年（一八六七年）には、慶応義塾に転じて、福沢諭吉に教えることとなった。

すでに述べたように、福沢諭吉は、両度欧米に渡航して、西洋の事情に通曉し、西洋の學術に造詣の深いことは、当時一頭地を擡んでいた。有的が彼を師と忝んだのも偶然ではない。有的の長男早矢仕四郎の覚書によると、有的が友人の英学を学ぶ者たちと会談したことがある。その時一人は福沢という人物はよほど英学が出来るそうだと聞いた。ところが他の一人はまた福沢は人の風上にも置けぬ男であるといった。また或者は、学ぶところは英学であつて人物ではないといった。結局その學問人物を知るためにその中で誰かが直接に福沢に面会することとなった。そこで有的は福沢を訪い、その人物に接して、一見これに傾倒し、直ちにその門に入ることとなったという。慶応義塾の記録には、慶応三年二月十二日早矢仕有的入塾とある。時に福沢は三十二歳、有的はそれより二歳若く三十歳であつた。

福沢はすでに名声が広く聞えていたが、有的もまた医師として一家を成していた。従つてこの二人の關係は、單なる師弟というよりは、むしろ志を同じうする友人に近かつた。有的が公私の生活あらゆる方面に、福沢の指導を仰いだことはもちろんであるが、福沢もまたその事業の多くの事柄について有的と相談した。いわば有的は、入門以来福沢と離れることのできない緊密な一体となつた。

福沢はかねてから志していた西洋文物輸入の任務を有的に託した。この間の経緯は、いまはこれを詳らかにする由もない。恐らく有的も福沢の勸説を受けて、自分のかねてからの志業と、全く違った道を歩むことに、不安も躊躇もあつたことであらう。しかしまた新時代に適應する新事業を担う者として、その使命を帯びたことについて、

興味も感激も感じたことであろう。何よりも有的は純粹な医師若しくは科学者であると共に、実業家としての素質と才能とを充分に具えていた。そして有的のその素質と才能とを発掘したのは、福沢に外ならなかった。有的としては、この知己に報ずるの念も、多分に心中にあったことであろう。ここに有的は福沢の勧めに従って、西洋の書籍を主として、薬品や雜貨など、その文化の産物を輸入する貿易事業を、その双肩に担うこととなった。その結果がすなわち丸屋商社の創立である。